

## 論文

## 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索（Ⅴ）

—— 否定的な対人的出来事に対するストレス対処の影響 ——

<sup>1</sup>諸井 克英 <sup>2</sup>岡野 仁美<sup>1</sup>同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・特別任用教授<sup>2</sup>同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2019年度卒業

# An Exploration of the Psychological Mechanism Underlying Ibasyo Feeling in Female Undergraduates (V): Effects of Stress-Coping with the Most Negative Interpersonal Life Events

<sup>1</sup>MOROI Katsuhide <sup>2</sup>OKANO Hitomi<sup>1</sup>Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor<sup>2</sup>Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2019

Keywords: ibasyo feeling, interpersonal coping, stress, life event.

## I. 問題

居場所とは、藤竹（2000）によると、環境地理的空間と意味的空間の観点から、次の3つに大別される。a) 社会的居場所、b) 人間的居場所、c) 匿名的場所。この居場所の問題は、若者のひきこもりや学校社会での様々な問題と関連して、臨床心理学や社会心理学の領域でも対象とされるようになった。

著者らは、この問題に対する計量的接近を試みてきた。岸・諸井（2011）は、先行諸研究を概観し、居場所感覚を「特定の生活領域に対する態度や感情全体」と定義し、この感覚を測る尺度を作成した。過去の研究で用いられた関連尺度の項目を収集・整理し、大学と家庭それぞれにおける居場所感覚を測定するための各60項目を新たに設けた。この尺度を女子大学に実施したところ、因子分析（主因子法、プロマックス回転〈 $k=3$ 〉）によって、大学における居場所感覚で5因子（「被受容感」、「精神的安定感」、「自己疎外感」、「自己没入感」、「自己有用感」）、家庭における居場所

感覚で3因子（「精神的安定感」、「自己有用感」、「自己没入感」）がそれぞれ抽出された。ここで作成された大学における居場所感覚尺度を用いて、大学における居場所感覚と他の様々な心理的傾向との関連が一連の研究で探索された。

教育社会で臨床的問題とされている過剰適応傾向（例えば、「いい子・よい子」など）と大学における居場所感覚との関連を探索するために、女子大学生を対象として次の3つの研究が試みられた。なお、過剰適応傾向とは、「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や欲求に応える努力を行うこと」（石津・安保，2008）と定義される。

諸井・坂上・野島・岡本（2015）による研究では、「過剰適応傾向・居場所感覚⇒心理的健康（自尊心、抑うつ傾向）」という影響図式が検討された。共分散構造分析によって、肯定的な居場所感覚の形成が心理的健康を促進することとともに、過剰適応傾向が居場所感覚や心理的健康を減損することが認められた。

続いて、湯之上・諸井（2016）は、大学入学直後（4～5月頃）の過剰適応傾向を想起させ、「大学1年次初期における過剰適応傾向（想起）⇒現時点での自尊心・大学における居場所感覚」という影響図式を共分散構造分析によって検討した。この研究でも入学直後の過剰適応傾向が現時点での自尊心や大学における居場所感覚に負の影響をおよぼしていることが確認できた。

さらに、諸井・湯之上・板垣（2017）は、高校2年次の自尊心と過剰適応傾向（それぞれ想起）が2年次の大学における居場所感覚（調査時点）に与える影響を調べた。共分散構造分析を行い、高校2年次の過剰適応傾向が自尊心を抑制するが、高校2年次に培われた自尊心が大学2年次の大学における居場所感覚を醸成することを意味する影響経路を確認した。

以上の3研究は、対面世界で経験する居場所感覚を対象とした。諸井・岸・米澤・永野（2018）の研究では、非対面世界での居場所感覚を問題にした。わが国におけるスマートフォンの普及とSNS（social networking service）利用の現状を踏まえると、SNS世界の中で形成された居場所感覚の様態を支える心理学的機制的解明は重要であるといえ、対面世界での心理学的不全（過剰適応傾向、非現実感傾向）との関連が検討された。単純相関分析や重回帰分析によって、対面世界での不全がSNS世界に肯定的な居場所感覚をもたらす場合と否定的な感覚を醸成することも見出された。

これらの一連の研究を踏まえ、本研究では、日常の対人関係の中で遭遇するストレスに対して採用する対処が大学という環境で醸成される居場所感覚にどのような影響をおよぼすかを検討する。ストレスとは、「心身の適応能力に課せられる要求（demand）、およびその要求によって引き起こされる心身の緊張状態を包括的に表す概念である」（岡安，1999）。

ところで、諸井（1995）は、孤独感研究の枠組みで孤独感をストレスと考え、孤独感に対する日常的对処が孤独感の抑制に繋がることを明らかにした。Folkman & Lazarus（1980）によると、ストレス事態における対処方略は次の2つに大別される。a）ストレスの源泉の回避・除去を目標とする問題中心的对処、b）ストレス事態と結びついた情動の低減・除去の企てである情動中心的对処。諸井（1995）は、男女大学生を対象に、短期的孤独感（ここ2週間の状態を回答）と長期的孤独感（この1年間の状態回答）を約半年間にわたり3時点で測定した（6・7月、10月、翌年1月）。2つの孤独感得点が3時点通じて、上位水準にあ

る者、中位水準にある者、および下位水準にある者に回答者を抽出した。その上で、孤独感の対処方略を説明変数と、これら3群を判別対象とする判別分析を試みた。男子では「消極的受容」と「友だちへの自己開示」、女子では「友だちへの交流」が有意な判別変数として得られた。つまり、男女ともに Folkman & Lazarus（1980）が大別した問題中心的对処が孤独感の低下に有効であった。興味深いことに、情動中心的对処と見なすことができる「消極的受容」は孤独感の慢性化に繋がっていた。

加藤（2000）は、過去のストレス対処を測るための様々な尺度を概観した上で、大学生用ストレスコーピング尺度を作成した（なお、加藤は coping という用語に対してコーピングという言葉を用いている。本研究では、加藤が命名した主成分に言及する際にはそのままコーピングと記述するが、基本的には対処という言葉を用いる）。加藤は、自由記述調査（大学入学後に友人関係で感じたストレスに対する行動を記述）に基づく反応を KJ 法により整理し、58個の対人的ストレス対処項目を作成した。「友人関係に起因するストレスフルなイベントに遭遇した」際にどのような対処を用いるかを男女大学生に評定させた。主成分分析（直交回転）によって3主成分を抽出した（ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピング）。

加藤（2003）では、2574名を対象に対人ストレスコーピング尺度を実施して、確認的因子分析によって尺度の次の4つの因子モデルの妥当性が検討された。a) 1因子モデル、b) 直交3因子モデル、c) 斜交3因子モデル、および d) 2次因子モデル。GFI（Goodness of Fit Index）と RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）によると、b)、c)、および d) が妥当と判断された（GFI>.93, RMSEA<.040）。

加藤は、この対人ストレス対処が友だちとの関係におよぼす影響についても一連の研究を行った。「性格⇒遭遇した否定的な対人的出来事の認知的評価⇒対人ストレス方略⇒心理ストレス反応・友だち関係への主観的満足」の枠組みで行われた、加藤（2001a）の研究では、パス解析によって次のことが認められた。a) ポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングは友だちとの関係満足感を高める、b) ネガティブ関係コーピングは友だちとの関係満足感を低める。また、加藤（2002）では、「対人ストレス方略⇒社会的支援⇒孤独感」の枠組みを設定し、パス解析によって次のことが認められた。a) ポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングは肯定的な社会的支援環境をもた

らす、b) ネガティブ関係コーピングは社会的支援環境を毀損するとともに、孤独感も高める。これらの研究に基づく、ポジティブ関係コーピングだけでなく解決先送りコーピングも肯定的な対人環境管理方策といえ、ネガティブ関係コーピングは適切な方策とはいえない。

加藤（2006）は、ふだん営んでいる友だち関係における志向性と対人ストレス対処との関係を男女大学生を対象として検討した。このために、友だちとのつきあい方を測定するために落合・佐藤（1996）が作成した尺度を利用した。クラスター分析によって回答者のつきあい方を4分類できることを確認し（「深く広く関わるつきあい方」、「深く狭く関わるつきあい方」、「浅く広く関わるつきあい方」、「浅く狭く関わるつきあい方」）、対人ストレスコーピング3得点との関連を調べた。a) 「深く広く関わるつきあい方」を志向する者はポジティブ関係コーピング、b) 「浅く広く関わるつきあい方」を志向する者はネガティブ関係コーピングや解決先送りコーピングを、それぞれ採用する傾向が認められた。b) の結果は、若者の表面的志向性（諸井・平井, 1999参照）が対人的困難に直面したときに、対人関係を積極的に放棄したり、問題を回避することによって支えられていることを示している。

本研究では、加藤（2000）が開発した尺度を利用して、日常生活の中で対人的困難が生じた時に用いられる対処の仕方と大学という環境における居場所感覚との関連を探索する。大学生が入学以来遭遇する様々な困難やその解決策を提唱した齋藤・石垣・高野（2020）によれば、ストレス喚起の可能性のある対人的事態は種々存在する（表1）。このことから対人ストレス対処と大学における居場所感覚との関連の検討は重要である。日常的に対人的困難に対して肯定的な改善・維持努力をする者は、大学において様々な対人的困難に出会っても肯定的方向に対応するはずである。結果として、肯定的な居場所感覚を醸成できであろう（仮説1）。

**仮説1:** ポジティブ関係対処を採る者は、大学における肯定的な居場所感覚を形成できるだろう。

対照的に、日常の対人関係の中で遭遇する困難に関係を回避する方向に対処したり、問題の解決自体を回避する仕方に対処する者は、大学という環境で居心地のよい居場所を形成することができないと推測できる（仮説2）。

**仮説2:** ネガティブ関係対処や解決先送り対処を採用する者は、大学における肯定的な居場所感覚を抱くことができないだろう。

これら2つの仮説を検討するために、大学における居場

**表1 学生生活においてストレスを喚起する可能性のある対人的事態（齋藤・石垣・高野, 2020より抜粋）**

孤立・孤独、仲間はずれ、いじめ・ハラスメント、片思い、異性関係の深まり、親子葛藤、きょうだい葛藤、上下関係、対象喪失など

\*齋藤ら（2020）が挙げた「人間関係の要因」を列記

所感覚に関する先行研究に引き続き（岸・諸井, 2011; 諸井・坂上ら, 2015; 諸井ら, 2017; 諸井ら, 2018; 湯之上・諸井, 2016）、女子大学生を対象として質問紙調査を実施した。

## Ⅱ. 方法

### 1. 質問紙調査の実施と対象

京都府内に位置する女子大学における社会心理学の講義を利用して、質問紙調査を実施した（2019年4月18・22日、211名）。回答にあたっては匿名性を保証し、実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。さらに、回答前には、回答の有無や内容が成績とは無関連であることも強調した。青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生192名を分析対象とした（2回生100名、3回生89名、4回生3名）。回答者の平均年齢は19.64歳（ $SD=0.70$ , 19～22歳）であった。

### 2. 質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、a) 大学における居場所感覚尺度、b) 否定的な対人的出来事の想起、c) 想起した出来事に関する対人ストレス対処尺度、から構成されている。

#### （1）大学における居場所感覚尺度

回答者が通学している大学で抱いている居場所感覚を測定するために、岸・諸井（2011）が作成した大学における居場所感覚尺度を用いた。岸・諸井は、「特定の生活領域に対する態度や感情全体」を居場所感覚と定義し、回答者が通う大学での居場所感覚と家庭での居場所感覚とを測定する尺度（各60項目）を先行研究に基づいて作成した。本研究では、大学における居場所感覚尺度をそのまま利用した（表3-a, 岸・諸井〈2011〉参照）。

「この6ヵ月間」の「大学」にいる時の自分自身の様子を思い浮かべさせ、60項目それぞれが当てはまる程度を4点尺度で評定させた（「4. かなり当てはまる」～「1. ほとんど当てはまらない」）。

#### （2）否定的な対人的出来事の想起

別の研究目的のために、諸井・大東・今井・山本（2015）

表2 否定的な対人的出来事に関する認知の検討

	平均値	SD	(a)	(b)
他の人たちが経験している「出来事」との比較	3.32	0.70	.85	.60
今までに経験した「出来事」との比較	3.58	0.70	.86	.63
「出来事」の記憶	3.22	0.88	.74	.48
3項目得点の平均値	3.37	0.62	説明率66.70%	$\alpha = .73$

N=192

SD: 標準偏差値

(a) 主成分分析における未回転第Ⅰ主成分負荷量

(b) 当該項目得点と他の項目合計得点とのピアソン相関値 ( $p < .001$ ) / Cronbach の信頼性係数値

は否定的な出来事の想起させ最も嫌だった出来事を同定させた。本研究では、想起させる出来事を「今までにまわりの人(たち)との間で経験した出来事」に限定し、「最も嫌だった出来事」を具体的に記述させた。その上で、諸井・大東ら(2015)と同じ設問に回答させた。a) まわりの人々が経験している出来事との比較(「4. かなり嫌だった」～「1. ほとんど嫌ではなかった」), b) 今までに経験した出来事との比較(「4. かなり嫌だった」～「1. ほとんど嫌ではなかった」), c) 経験した出来事の記憶(「4. かなりはっきりと覚えている」～「1. ほとんど覚えていない」)。

### (3) 想起した対人的出来事に対するストレス対処

具体的に同定した「最も嫌だった対人的出来事」が起きた時に、回答者がどのような対処をしたかを想起させた。そのために、加藤(2000)が作成し大学生用ストレスコーピング尺度項目を修正し、34項目を修正して対人ストレス対処尺度項目として用いた(表3-b, 付表1参照)。

回答者が記述した対人的出来事が起きた時を思い出させ、34項目それぞれが回答者のその時の気持ちや行動にどのくらいあてはまるかを4点尺度で回答させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお、評定順の効果を相殺するために、以上の2つの尺度では評定用紙を頁単位(それぞれ、6頁、4頁)でランダムに並び替えた。

## Ⅲ. 結果

### 1. 否定的な対人的出来事に関する評定

想起出来事に関する3項目の評定は、先行研究(諸井・大東ら, 2015)と同様に3項目の単一次元性の検討を行った(表2)。主成分分析, 項目-全体相関分析, および $\alpha$ 係数値により単一次元性が確認できた。3項目の平均値を出来事インパクト得点とした。この得点が3.34以上の者を出

来事インパクト高群, 3.34未満の者を出来事インパクト低群とした(高群  $m=3.84$ ,  $SD=.17$ ,  $N=95$ ; 低群  $m=2.91$ ,  $SD=.55$ ,  $N=97$  / 対応のある  $t$  検定:  $t_{(114.29)}=16.02$ ,  $p=.001$ )。

## 2. 各尺度の検討

### (1) 分析の手続き

2尺度それぞれで項目水準での検討を行い、項目平均値の偏り ( $1.5 < m < 3.5$ ) と標準偏差値 ( $SD \geq .60$ ) のチェックをし、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に因子分析(最尤法, プロマックス回転 ( $k=3$ ))を行った。まず、初期解での初期共通性を算出し、値が低い項目 ( $< .25$ ) を除いた。残りの項目を分析対象として、初期因子固有値  $\geq 1.00$  を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、a) 特定因子への負荷量が十分に大きく(絶対値  $\geq .40$ ), b) 他因子への負荷が小さい(絶対値  $< .40$ ) という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ .40 以上の負荷量を示すように項目を削除しながら、a) と b) の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが現れた解を採用した。

次に、因子分析の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準(絶対値  $\geq .40$ ) に項目を選別し、因子概念に一致した方向に得点が高くなるように得点調整をしたうえで下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1次元性の確認を行い(項目-全体相関分析,  $\alpha$  係数値), 構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

### (2) 大学における居場所感覚尺度

項目水準の検討を行うと1項目のみが不適切であったので (uni\_b\_9;  $m=1.5$ ,  $SD<.60$ ), 残りの59項目で因子分析を行った。初期共通性の値を確認した上で ( $\geq .35$ ), 算出可能な2~7因子解(初期因子固有値  $\geq 1.00$ ) を検討した。4因子解で最も明確で解釈可能な因子パターンが現れた(表3-a)。第Ⅱ因子, 第Ⅲ因子, および第Ⅳ因子に負荷が高



表3-a 大学における居場所感覚尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果  
—回転後の因子負荷量—

当該因子負荷量				当該因子負荷量			
〔Ⅰ. 自己存在肯定感〕				〔Ⅲ. 自己疎外感〕			
uni_e_4	大学には、私と気持ちに通じ合う人がいる。	被	.82	uni_a_7	大学にいと、私は自分だけ孤立している感じがする。	疎	.82
uni_e_10	大学には、私のことを気にかけてくれる人がいる。	被	.76	uni_c_5	大学では、私は一人ぼっちの感じがする。	疎	.81
uni_b_5	大学には、私の存在を認めてくれる人がいる。	被	.76	uni_c_8	大学にいと、私はさびしくなる。	疎	.75
uni_a_2	大学には、私を本当に理解してくれる人がいる。	被	.75	uni_f_5	大学では、私はまわりの人の輪になかなか入れない。	疎	.70
uni_b_10	大学には、私を大切にしてくれる人がいる。	被	.71	uni_d_1	大学には、私の居場所がない感じがする。	疎	.65
uni_d_9	大学では、私が支えとなっている人がいる。	有	.70	uni_c_2	大学にいと、私は落ち込みがちになる。	疎	.61
uni_d_8	大学には、私を受け入れてくれる人がいる。	被	.69	uni_d_4	大学では、私の考えや悩みを誰にも分かってもらえない感じがする。	被	.58
uni_a_8	大学には、私の悩みを聞いてくれる人がいる。	被	.68	uni_f_8	大学にいても、私は自分らしさを出せない。	疎	.58
uni_b_6	大学には、私と同じ考え方や価値観をもっている人がいる。	被	.67	uni_f_1	大学にいと、私はまごつくことが多い。	疎	.49
uni_a_3	大学に私がいないと、さびしがる人がいる。	残	.64	uni_a_10	大学では、私には共感できないことが多い。	残	.47
uni_f_6	大学では、私のことを必要とする人がいる。	有	.60	uni_a_4	大学は、私にとって居心地が悪い。	残	.45
uni_a_9	大学に私がいないと、困る人がいる。	有	.59	uni_f_10	大学では、私はまわりの人から受け入れられていない気がする。	疎	.43
uni_e_5	大学では、私は頼りにされている。	有	.44	〔Ⅳ. 自己没入感〕			
uni_c_10	大学では、私は心から泣いたり笑ったりできる。	精	.42	uni_f_3	大学にいても、私には得るものがないような感じがする。	* 没	-.74
uni_c_6	大学では、誰かに役立つことができる。	有	.41	uni_d_7	大学にいても、私は何もすることがない。	* 没	-.68
〔Ⅱ. 精神的安定感〕				uni_d_10	大学では、私自身を見つめることができない。	* 没	-.56
uni_d_5	大学にいと、私はほっとできる。	精	.82	uni_f_2	大学にいと、私はやりがいを感じる。	没	.53
uni_e_8	大学にいと、私は安定した気持ちになる。	精	.80	uni_b_8	大学では、私自身のことについて考えることができる。	没	.48
uni_e_1	大学にいと、私はくつろげる。	精	.77				
uni_a_5	大学にいと、私はリラックスできる。	精	.75				
uni_c_3	大学にいと、私は安心できる。	精	.69				
uni_b_1	大学にいと、私は幸せを感じる。	精	.66				
uni_c_9	大学にいと、私は居心地がいい。	精	.61				
uni_b_7	大学にいと、私は楽しくなる。	精	.56				
uni_f_9	大学では、私は自由な感じがする。	残	.56				
uni_e_7	大学にいと、私は生き生きとできる。	精	.55				
uni_d_6	大学にいと、私は自分自身を実感できる。	残	.48				
uni_e_2	大学にいと、私は自分を見失わないでいられる。	残	.43				
uni_d_2	大学には、いたくないと思う。	* 残	-.43				
uni_f_4	大学では、私は自分の好きなことができる。	没	.42				

N=192

初期固有値 $\geq 1.98$ ; 初期説明率56.44%適合度:  $\chi^2_{(887)}=1368.05$ ,  $p=.001$ 

\*: 逆転項目

岸・諸井（2011）との対応：被受容感，精神的安定感，自己疎外感，自己没入感，自己有用感

い項目を見ると、ほぼ岸・諸井（2011）と同じであり、それぞれ「精神的安定感」、「自己疎外感」、および「自己没入感」と名づけた。第Ⅰ因子では、岸・諸井による「被受容感」の項目の因子負荷が高いが、「自己有用感」の項目の負荷も高かった。そこで、負荷の高い項目の内容を考慮して「自己存在肯定感」とした。

### (3) 対人ストレス対処尺度

項目水準の検討によるとすべての項目が適切であった。

因子分析を行ったところ、良好な初期共通性の値が得られた（ $\geq .33$ ）。算出可能な2～7因子解（初期因子固有値 $\geq 1.00$ ）を検討した。3因子解では、加藤（2000）と同様な因子が得られた。また、4因子解も明確な解であった。これは、3因子解で抽出されたポジティブ関係対処が a) 自分自身を成長させる方向の対処と b) 相手を受容する方向の対処に分離することを示した。さらに、後述する分析では、大学における居場所感覚と弁別的な結果をもたらした。

表3-b 否定的な対人的出来事に対するストレス対処尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ）の結果  
一回転後の因子負荷量－

当該因子負荷量				当該因子負荷量			
【Ⅰ. ネガティブ関係対処】				【Ⅲ. 解決先送り対処】			
cope_a_6	その人と話をしないようにした。	ネ	.90	cope_a_4	この出来事を気にしないようにした。	先	.82
cope_b_9	その人を避けた。	ネ	.86	cope_b_7	この出来事をあまり考えないようにした。	先	.81
cope_a_2	その人と関わり合わないようにした。	ネ	.83	cope_a_8	この出来事にこだわらないようにした。	先	.73
cope_b_1	その人と友だちづきあいをしないようにした。	ネ	.68	cope_c_5	この出来事は忘れるようにした。	先	.54
cope_b_5	その人のことを無視するようにした。	ネ	.67	cope_b_3	その先何とかなると思った。	先	.51
cope_d_1	その人と適度な距離を保つようにした。	ネ	.59	cope_c_8	こんなものだと割り切った。	先	.49
cope_c_6	その人のことを受け入れるようにした。	* ポ	-.50	cope_d_2	自分は自分，人は人と思った。	先	.43
cope_c_4	その人とは表面上のつきあいをするようにした。	ネ	.46	【Ⅳ. 他者受け入れ対処】			
【Ⅱ. 自己成長対処】				cope_a_9	その人と積極的に関わろうとした。	ポ	.77
cope_b_4	この経験で何かを学んだと感じた。	ポ	.79	cope_a_5	その人ともっと話をするようにした。	ポ	.77
cope_c_3	自分自身が人間として成長したと感じた。	ポ	.68	cope_b_8	その人の良いところを探そうとした。	ポ	.52
cope_a_3	これも社会勉強だと思った。	ポ	.68	cope_a_7	自分自身の存在の良いところを訴えた。	ポ	.49
cope_b_2	自分自身のことを見つめ直した。	ポ	.66				
cope_c_9	自分自身の悪いところを反省した。	ポ	.51				
cope_d_3	その人の気持ちになって考えてみた。	ポ	.45				

$N=192$

初期固有値 $\geq 1.53$ : 初期説明率57.17%

適合度： $\chi^2_{(206)}=417.81, p=.001$

\*: 逆転項目

加藤 (2000) との対応: ポジティブ関係コーピング, ネガティブ関係コーピング, 解決先送りコーピング

表3-c 各尺度における下位尺度得点の検討

	平均値	標準偏差	(a)	(b)	(c)
〔大学における居場所感覚〕					
I. 自己存在肯定感	2.88 ab	0.52	$\alpha = .93$	.55～.76	0.08, $p=.005$
II. 精神的安定感	2.83 b	0.57	$\alpha = .94$	.57～.79	0.07, $p=.035$
III. 自己疎外感	1.93 c	0.55	$\alpha = .91$	.50～.76	0.09, $p=.001$
IV. 自己没入感	2.95 a	0.56	$\alpha = .81$	.52～.64	0.11, $p=.001$
〔反復測定分散分析〕		$F_{(1.77, 337.89)}=148.64*, p=.001$			
〔対人ストレス対処〕					
I. ネガティブ関係対処	2.55 b	0.81	$\alpha = .88$	.43～.83	0.07, $p=.038$
II. 自己成長対処	2.76 ab	0.73	$\alpha = .81$	.47～.68	0.10, $p=.001$
III. 解決先送り対処	2.86 a	0.67	$\alpha = .81$	.43～.70	0.09, $p=.001$
IV. 他者受け入れ対処	1.89 c	0.71	$\alpha = .75$	.37～.66	0.13, $p=.001$
〔反復測定分散分析〕		$F_{(2.42, 462.56)}=70.24*, p=.001$			

 $N=192$ 

\*: *Greenhouse-Geisser* の検定

\*\*: 異なる英文字は有意に異なることを表す ( $p < .05$ , Bonferroni の方法)

(a) : *Cronbach* の  $\alpha$  係数値

(b) : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値

(c) : 分布の正規性検定: *Kolmogorov-Smirnov* の検定に対する *Lilliefors* の修正値

そこで、本研究では4因子解を採用した（表3-b）。加藤（2000）と同様であったⅠ因子と第Ⅲ因子は、それぞれ「ネガティブ関係対処」、「解決先送り対処」と命名した。加藤のポジティブ関係コーピングが分離した第Ⅱ因子と第Ⅲ因子については、それぞれ「自己成長対処」、「他者受け入れ対処」とした。

#### （4）下位尺度の検討

2つの尺度で得られた4下位尺度それぞれについて、下位尺度の信頼性を検討した（表3-c）。すべての下位尺度で、a) *Cronbach* の  $\alpha$  係数値および b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値が適切な数値を示したので、構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

大学における居場所感覚4下位尺度得点間の比較をすると、「自己没入感」が最も高く、「自己疎外感」が最も低かった。対人ストレス対処4下位尺度得点では、「解決先送り対処」で最も高く、「他者受け入れ対処」で最も低かった。

表4-a 出来事インパクトと対人的ストレス対処および大学における居場所感覚との関係  
—ピアソン相関値—

出来事インパクト	
〔対人ストレス対処〕	
Ⅰ. ネガティブ関係対処	.12
Ⅱ. 自己成長対処	.05
Ⅲ. 解決先送り対処	-.29 a
Ⅳ. 他者受け入れ対処	-.11
〔大学における居場所感覚〕	
Ⅰ. 自己存在肯定感	-.04
Ⅱ. 精神的安定感	-.05
Ⅲ. 自己疎外感	.08
Ⅳ. 自己没入感	.04

$N=192$

a:  $p < .001$

表4-b 対人ストレスに対する対処下位尺度得点および大学における居場所下位得点の出来事インパクト群の比較—*t* 検定—

		平均値	標準偏差	独立した <i>t</i> 検定
〔対人ストレス対処〕				
Ⅰ. ネガティブ関係対処	高群	2. 71	0. 84	$t_{(190)}=2. 78, p=. 006$
	低群	2. 39	0. 74	
Ⅱ. 自己成長対処	高群	2. 75	0. 83	$t_{(172. 84)}=-0. 16, ns.$
	低群	2. 77	0. 61	
Ⅲ. 解決先送り対処	高群	2. 64	0. 73	$t_{(168. 45)}=-4. 86, p=. 001$
	低群	3. 08	0. 51	
Ⅳ. 他者受け入れ対処	高群	1. 71	0. 66	$t_{(190)}=-3. 57, p=. 001$
	低群	2. 06	0. 72	
〔大学における居場所感覚〕				
Ⅰ. 自己存在肯定感	高群	2. 88	0. 55	$t_{(190)}=-0. 04, ns.$
	低群	2. 88	0. 49	
Ⅱ. 精神的安定感	高群	2. 81	0. 58	$t_{(190)}=-0. 43, ns.$
	低群	2. 85	0. 56	
Ⅲ. 自己疎外感	高群	1. 93	0. 58	$t_{(190)}=0. 15, ns.$
	低群	1. 92	0. 53	
Ⅳ. 自己没入感	高群	2. 95	0. 58	$t_{(190)}=-0. 22, ns.$
	低群	2. 96	0. 54	

高群:  $N=95$ ; 低群:  $N=97$

表5-a 対人ストレス対処と大学における居場所感覚との関係—ピアソン相関値—

	I. 自己存在肯定感	II. 精神的安定感	III. 自己疎外感	IV. 自己没入感
I. ネガティブ関係対処	-.08	-.09	.10	-.07
II. 自己成長対処	.23 a	.15 c	.04	.06
III. 解決先送り対処	.09	.05	.01	-.04
IV. 他者受け入れ対処	.09	.09	.06	-.02

N=192

a:  $p < .001$ ; c:  $p < .05$ 表5-b 大学における居場所感覚におよぼすストレス対処の効果—重回帰分析（ステップワイズ法）—  
：全体

説明変数 I. ネガティブ関係対処 II. 自己成長対処 III. 解決先送り対処 IV. 他者受け入れ対処 出来事インパクト			
従属変数 I. 自己存在肯定感			
II. 自己成長対処	$\beta = .23$	$p = .001$	
	$R^2 = .05$	$p = .001$	
従属変数 II. 精神的安定感			
II. 自己成長対処	$\beta = .15$	$p = .036$	
	$R^2 = 0.02$	$p = .036$	

N=192

ステップワイズ法（投入基準  $p < .05$ ; 除去基準  $p > .10$ ） $\beta$  : 標準化偏回帰係数;  $R^2$  : 決定係数

有意な規定因が見出された結果のみ表示

### 3. 出来事インパクト、否定的な対人的出来事に対するストレス対処、および大学における居場所感覚との関係

#### (1) 出来事インパクトと対人ストレス対処および大学における居場所感覚との関係

出来事インパクト得点と対人ストレス下位尺度得点および大学における居場所感覚下位尺度得点との間のピアソン相関値を求めた（表4-a）。出来事インパクト得点が高いほど「解決先送り対処」を取らないことを示す有意な負の相関値が得られたのみであった。

次に下位尺度8得点それぞれで出来事インパクト高群と低群の比較（独立した  $t$  検定; 表4-b）。対人ストレス対処では3つの対処で有意差が現れ、低群よりも高群の者は、「ネガティブ関係対処」をとり、「解決先送り対処」と「他者受け入れ対処」をとらなかった。

なお、大学における居場所感覚についても同様の分析を行ったが、出来事インパクトと無関係であった。

#### (2) 対人ストレス対処が大学における居場所感覚におよぼす影響

##### ①単純相関分析

対人ストレス対処4得点と大学における居場所感覚4得点との間のピアソン相関値を算出した（表5-a）。「自己成長対処」と「自己存在感」および「精神的安定感」との間で有意な正の相関があった。

##### ②重回帰分析

大学における居場所感覚の規定因を探るために、対人ストレス対処4得点および出来事インパクト得点を説明変数とし、大学における居場所感覚4得点それぞれを従属変数とする一連の重回帰分析をステップワイズ法（投入基準  $p < .05$ ; 除去基準  $p > .10$ ）を用いて行った（表5-b）。

「自己成長対処⇒自己存在肯定感」と「自己成長対処⇒精神的安定感」という2つの影響経路が認められたが、これらは先の単純相関分析で見られた傾向と同じであった。

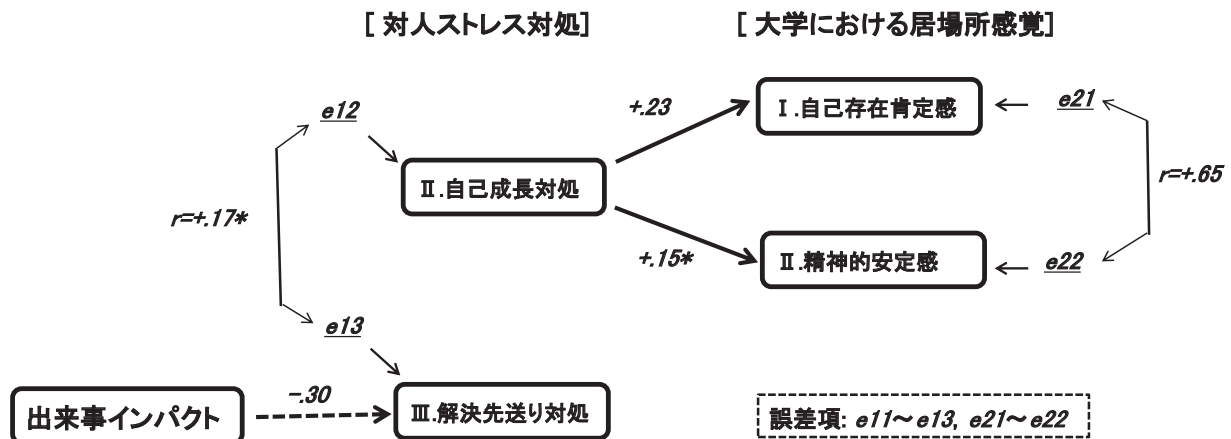
##### ③共分散構造分析

出来事インパクトの規定因に関する因果分析を Amos26.0.0 を用いて行った。前述した単純相関分析および重回帰分析で認められた関係に基づきモデルを作成し、観測変数の構造方程式（最尤推定法; 豊田, 1998）の分析を試みた。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た（図1）。なお、この最終モデルで確認されたパスは、単純相関分析および重回帰分析の結果に一致していた。「出来事インパクト⇒解決先送り対処」、「自己成長対処⇒自己存在肯定感/精神的安定感」の影響関係が現れた。

## IV. 考察

本研究は、大学における居場所感覚の基底にある心理学的機制を探索するために行われた一連の研究（岸・諸井, 2011; 諸井・坂上ら, 2015; 諸井ら, 2017; 諸井ら, 2018; 湯之上・諸井, 2016）に引き続いて行われた。今回の研究





矢印: 標準化パス係数[\*以外すべて $p<.001$ ; \* $p<.05$ ]

適合度:  $\chi^2_{(5)}=1.69$ ,  $p=.890$ ,  $GFI=.996$ ;  $AGFI=.989$ ;  $RMSEA=.000$

図1 出来事インパクトおよび対人ストレス対処が大学における居場所感覚におよぼす影響 (N=196)  
—観測変数の構造方程式による分析 (Amos26.0.0, 最尤推定法)—

では、日常の対人関係の中で遭遇するストレスに対して採用する対処が大学という環境で醸成される居場所感覚にどのような影響をおよぼすかを調べた。

日常生活で生じる対人ストレスに回答者がどのように対処しているかを測定するために、加藤（2000）が作成した対人ストレスコーピング尺度を用いた。この尺度は対人ストレス対処の3側面を測定している（加藤，2000；2003）。しかし、本研究では、因子分析によって抽出された3因子解と4因子解ともに明確な因子パターンが示された。本研究での4因子解では、加藤と同様に「ネガティブ関係対処」、「解決先送り対処」が得られた。しかし、加藤でのポジティブ関係コーピングが、自分の成長に主眼をおく対処と他者の受容を重要視する対処とに分離した。加藤による一連の研究では3因子解に基づいて行われているが、本研究では次の2点から4因子解が妥当と判断した。a) 分離した2つの側面が弁別的であること、b) この2因子間相関の値がそれほど高くないこと（.27；表2-b）。この問題は、今後検討すべきであろう。

本研究では、直面した出来事のインパクトと採用方略との関係を見た。相関分析では、直面した出来事のインパクトが低いほど解決先送り対処を採用する傾向のみがあった（表3-a）。しかし、インパクト別に回答者を2分した分析では（表3-b）、インパクトを低く認知している者は解決先送り対処や他者受け入れ対処を採るが、ネガティブ関係対処を採用しない。これらは、直面した出来事のインパ

クトが低い場合には、冷静に関係が持続するような対応を行うことができることを示している。しかしながら、自己成長対処が出来事のインパクトと無関係であることから、そもそもこの対処方略の採用は状況に対する対応というよりもその人固有の傾性的特徴と見做すことができるかもしれない。直面した出来事のインパクトと対処パターンとの関連は今後明らかにする必要があるといえる。

次に本研究の主目的である対人ストレス対処と大学における居場所感覚との関連について、単純相関分析（表4-a）と重回帰分析（表4-b）では同じ関係が認められた。「自己成長対処」が「自己存在肯定感」と「精神的安定感」と正の関係にあった。共分散構造分析によると（図1）、単純相関分析や重回帰分析と一致して、「自己成長対処→自己存在肯定感／精神的安定感」の有意なパスが確認された。本研究では、他の3つの対人ストレス対処は、居場所感覚とは無関係であった。先述した加藤（2001a；2002）の研究によれば、解決先送りストレス対処も居場所感覚に肯定的影響をおよぼすはずであるが、そうではなかった。

これは、対人ストレス対処が性格のような傾性的側面をもつと考えれば、解決できるかもしれない。日常的場面での対人関係ストレスに対して、自己の成長に主眼をおいた対処を採用している者は、大学生活で遭遇する様々な出来事に対しても同様に自己成長を図る仕方に対処するために、他者から自分を受容されたり、自分を必要とされるような場所であるという感覚（「自己存在肯定感」）を形成できる。

さらには、心理的に安定感を抱き、本当の自分を維持できる場所という感覚を抱くことができるのだろう。しかしながら、先述したように、この「自己成長対処」が遭遇した出来事のインパクトと無関係であることを踏まえると、傾性的特徴として直面する事態に自己成長を考慮しながら対応する者は、大学という環境の中で生起する様々な出来事にもそのように振る舞うので、良好な居場所感覚を醸成できることになる。

対照的に解決先送り対処やネガティブ関係対処は、肯定的な居場所感覚の傾性にとって正と負の2つの働きをするのかもしれない。大学生活の中で遭遇した対人的困難の解決が当事者にとって難しい場合には直面する問題に向き合わない形の対処は、解決策が曖昧なまま対処するよりも一過的に有効かもしれない。しかし、この方略を続けると、肯定的な居場所感覚を大学生活の中に醸成することができないだろう。

ところで、Folkman らに従えば、ストレスに対する対処は、次のように定義される。「能力や技能を使い果たしてしまうと判断され自分の力だけではどうすることもできないとみなされるような、特定の環境からの強制と自分自身の内部からの強制の双方を、あるいはいずれか一方を、適切に処理し統制していこうとしてなされる、絶えず変化していく認知的努力と行動による努力」(Lazarus & Folkman, 1984)。つまり、対処は、一連の過程で生じるのであり、特性とは異なるのと定義された。したがって、本研究で取り扱っている対処も一連の過程で生じるものとすれば、性格のような傾性的特徴を測定しているわけではないことになる。加藤 (2001b) は、対人ストレス対処と性格との関連を Big Five 尺度 (和田, 1996) を用いて検討した。しかし、誠実性が高い者ほど解決を先送りする対処を用いる傾向があるなど、矛盾する結果があった。

同様の問題に直面した不安研究領域では、特性不安 (trait-anxiety) と状態不安 (state-anxiety) が区別されている。前者は「不安状態の経験に対する個人の反応傾向を反映するもので、比較的安定した個人の傾向を示すものである」と定義される。他方、後者は「個人がその時おかれた生活条件により変化する、一時的な情緒状態である」とされる (曽我, 1983)。この区別に従えば、特性不安は性格概念に包摂された概念といえよう。したがって、本研究で取り扱っている対人ストレス対処という概念についても、特性-状態的アプローチが可能である (ちなみに、先述した孤独感に関する諸井 (1995) の研究では、評定基準として「ここ2週間の状態」、「この1年間の状態」の2通り

表6 対人ストレスに類似した概念 (橋本, 2005より)

interpersonal stress	conflictual social interactions
social conflict	problematic social interactions
negative interactions	social rejection
social undermining	negative social interactions
conflicted support network	interpersonal obstacles
negative support	disregard
social stressors	social network upset

を設け、それぞれ短期的孤独感、長期的孤独感とした)。

しかし、回答者固有の傾性的特徴としての性格という仮定自体、歴史的には批判に曝されている。つまり、性格の存在を巡る一貫性論争である (渡邊・佐藤, 1994)。性格の存在の根拠として次の2点が満たされないといけない。a) 継続的安定性 (時間が経過しても行動に現れる規則性が大きく変化することはない)、b) 通状況的安定性 (当該個人を取り巻く環境が変化してもその規則性が持続する)。

さらには、橋本 (2005) が指摘するように、対人ストレスという概念は、対人関係に起因するストレスと定義しても「あまりに幅広く大雑把」なのである。その結果、「対人ストレスに類する概念は乱立」状況にあるといえる (表6)。したがって、a) 対人状況の整理と b) 対人的ストレス対処の測定方法の吟味 (特性-状態概念の弁別) を踏まえながら、対人ストレス対処と大学における居場所感覚の形成との関連をさらに探る必要がある。

#### 〈付記〉

(1) 本論は、第2著者の岡野仁美が第1著者の下で卒業研究 (人間生活学科2019年度卒業論文) のために立案・実施した研究に基づいている。

(2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 26.0.0.1 for Windows と IBM SPSS Amos version 26.0.0 for Windows を利用した。

## V. 引用文献

- Folkman, S., Lazarus, R.S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, 21, 219-239.
- 藤竹 暁 2000 居場所を考える 藤竹 暁 (編)『現代人の居場所 (現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ3)』至文堂 47-57頁
- 橋本 剛 2005『ストレスと対人関係』ナカニシヤ出版

- 石津憲一郎・安保英勇 2008 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, **56**, 23-31.
- 加藤 司 2000 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, **48(2)**, 225-234.
- 加藤 司 2001a 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49(3)**, 295-304.
- 加藤 司 2001b 対人ストレスコーピングと Big Five との関連性について 性格心理学研究, **9(2)**, 140-141.
- 加藤 司 2002 対人ストレス過程における社会的相互作用の役割 実験社会心理学研究, **41(2)**, 147-154.
- 加藤 司 2003 対人ストレスコーピング尺度の因子的妥当性の検証 人文論究 (関西学院大学), **52**, 56-72.
- 加藤 司 2006 対人ストレス過程における友人関係目標 教育心理学研究, **54(3)**, 312-321.
- 岸可奈子・諸井克英 2011 女子大学生における居場所感覚—大学と家庭という心理的空間— 生活科学 (同志社女子大学), **45**, 20-28.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. Springer Publishing Company, Inc. 本明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) 『ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—』1991 実務教育出版
- 諸井克英 1995 『孤独感に関する社会心理学的研究—原因帰属および対処方略との関係を中心として—』風間書房
- 諸井克英・大東奈央・今井友紀・山本真央 2015 女子大学生における否定的出来事の経験に関する記憶表象—解離性傾向との関連— 生活科学 (同志社女子大学), **49**, 18-27.
- 諸井克英・平井加苗 1999 若者の対人管理に関する社会心理学的研究—表面的関係志向性と対人関係有能性との関連を中心として— 人文論集 (静岡大学人文学部), **50(2)**, 35-62.
- 諸井克英・岸沙耶香・米澤美幸・永野遥果 2018 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (IV) — SNS (social networking service) 世界における居場所感覚— 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), **35**, 183-195.
- 諸井克英・坂上 舞・野島 彩・岡本有美子 2015 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索—過剰適応傾向, 抑うつ傾向, および自尊心との関連— 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), **32**, 71-83.
- 諸井克英・湯之上 葵・板垣美穂 2017 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (III) —高校時代の自尊心と過剰適応傾向の影響— 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), **34**, 109-121.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあひ方の発達の变化 教育心理学研究, **44(1)**, 55-65.
- 岡安孝弘 1999 ストレス 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 『心理学辞典』有斐閣
- 齋藤憲司・石垣琢磨・高野 明 2020 『大学生のストレスマネジメント—自助の力と援助の力—』有斐閣
- 曾我祥子 1983 日本版 STAIC 標準化の研究 心理学研究, **54(4)**, 215-221.
- 豊田秀樹 1998 『共分散構造分析入門 [入門編] —構造方程式モデリング—』朝倉書店
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67(1)**, 61-67.
- 渡邊芳之・佐藤達哉 1994 一貫性論争における行動の観察と予測の問題 性格心理学研究, **2(1)**, 68-81.
- 湯之上 葵・諸井克英 2016 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (II) —大学入学初期の過剰適応傾向の影響— 生活科学 (同志社女子大学), **50**, 24-32.

付表1 対人ストレス対処尺度における残余項目

cope_a_1	その人の考えや気持ちをもっと知ろうとした。
cope_b_6	その後もその人にあいさつをするように心がけた。
cope_c_1	このことをまわりの友だちに相談した。
cope_c_2	何もせず, 自然の成り行きに任せた。
cope_c_7	まわりの人たちと接触しないようにした。
cope_d_4	その人のほうが悪いと, まわりの人たちにしゃべった。
cope_d_5	たくさんの友だちをつくることにした。
cope_d_6	その人の鼻を明かすようなことを考えた。
cope_d_7	その人に自分自身の意見を言うようにした。

